

2018 年度研究大会

2018 年度研究大会は、以下の通りである。

- (1) 日時：2018 年 12 月 8 日（土）
- (2) 時間：12 時 30 分～18 時
- (3) 場所：埼玉大学教養学部 21 番教室
- (4) 研究大会の進行：司会（望月雅美・吉川巧也）、口頭発表（発表 35 分＋質疑 25 分）

①井上直美（埼玉大学教養学部生）

「文末「～てみせた」の典型形式に関する一考察—一級外項目または下位ポイントの指導を目指して—」

②金善花（東京学芸大学専門研究員）

「次元形容詞「長い」の意味体系について」

③劉璐瑶（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

「中国人日本語学習者の会話における一人称代名詞の使用について—過剰使用を中心に—」

④松本匡史（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

「コスタリカ日本語教育における NT と NNT の問題点について—ビリーフ調査を通して—」

⑤吉川巧也（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

「授受動詞の使用傾向に関する研究—「てくださる」と「いただく」型を中心に—」

文末「～てみせた」の典型形式に関する一考察 —級外項目または下位ポイントの指導を目指して—

井上直美（埼玉大学教養学部生）

「テミセル」という表現は『日本語能力試験の出題基準〔改訂版〕』に記載のない文法項目、いわゆる級外項目である。それもあってか、「テミセル」は日本語学習教材類に記述が少ない。日本語学習教材類には「彼は子供たちの前で実際にボールを蹴ってみせた。」のようなやり方を動作で示す用法、あるいは「私は明日の試合で絶対に勝ってみせる。」のような動作主の決意を表す用法が記述されている。しかし、インターネットニュースや小説などには、この2つの用法では説明できない用例が多数見られる。例えば「彼は疑惑を否定してみせた。」や「彼は笑ってみせた。」といったものである。そこで、本発表では、書き言葉の文末に現れる「てみせた。」について BCCWJ を用いて実例調査を行い分析した。そして、「誰が何を見せたか」という観点から先行研究とは違う5分類を示した上で、抜け落ち部分を指摘し、これらについても指導することを目指した提言を行った。

「次元形容詞「長い」の意味体系について」

金善花（東京学芸大学専門研究員）

本稿では、日本語と中国語の次元形容詞「長い」と“长”の空間的用法に関するアンケートを実施し、アンケートで挙げられた事例から複数の意味を抽出し、認知度の高さによって、「長い」と“长”のプロトタイプを認定し、その内部構造を対照してみた。その結果、〈線的広がり大きい〉〈固定的な方向性を持たない〉という意味特徴が中心的な意味カテゴリーとして位置づけられている点では共通しているが、「長い」では、〈自ら伸びる性質を持つ〉〈人間にとって有意義な（内部）空間を持たない〉という意味特徴が中心的な意味カテゴリーとして位置づけられているのに対し、“长”では、〈伸びるイメージを持つ〉〈人間にとって有意義な（内部）空間を持つ〉意味特徴が中心的な意味カテゴリーとして位置づけられていることが分かる。また、「長い」と“长”はプロトタイプの意味、意味拡張に見られる認知プロセス（プロトタイプとの類似性による意味拡張、スキーマによる意味拡張）、認知主体との関係によって動機付けする点で類似していることが分かった。

中国人日本語学習者の会話における一人称代名詞の使用について —過剰使用を中心に—

劉璐瑶（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

付（2007）は日本語の一人称代名詞（わたし、ぼく、おれなど）の使用頻度が低い、それに対して、現代中国語一人称代名詞（我など）は使用頻度が高いと述べている。筆者は日本人と比べると中国人学習者が一人称代名詞を過剰に使用していることが気になった。例えば「私は～と申します、私は研究したいテーマは～です」のような場合である。学習者会話の自然さを求めるために一人称代名詞の使用およびその指導を欠くことはできないと思われる。

本研究は「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を使い、ロールプレイで使用された一人称代名詞の形態的な特徴（共起助詞、共起述語、語用論的な要因における形態特徴）を分析し、中国人日本語学習者は、日本人母語話者より一人称を過剰に使用していることを確認した。また、過剰使用は、文法対応のズレによる母語干渉が見られ、さらに語用論的な使い方の特徴も見られると考えられる。

今後、文法的と語用論的な面から中国人日本語学習者の一人称代名詞の過剰使用の特徴を明らかにしたい。

コスタリカ日本語教育における NT と NNT の問題点について —ビリーフ調査を通して—

松本匡史（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本稿では、コスタリカにおいて日本語教育に従事した経験を持つ日本語母語話者教師（以下 NT）、日本語非母語話者コスタリカ人日本語教師（以下 NNT）とコスタリカ人日本語学習者の言語学習に対する考え（以下ビリーフ）を調査し、3 グループの比較を通して、コスタリカ日本語教育の問題点、主に現地教師（NNT）養成と NT の役割について述べた。

調査データ収集後、平均値と標準偏差を計算し統計処理をした。「NT と学習者」では平均値間に 5%水準以下で 34 項目で有意差が見られた。「NNT と学習者」では 8 項目、「NT と NNT」では 27 項目において有意差が見られた。

ビリーフ調査の結果を踏まえ、コスタリカ日本語教育の問題点として、現地教師養成の指導方向性が決まっていないことが大きな問題と指摘した。

授受動詞の使用傾向に関する研究 —「てくださる」と「いただく」型を中心に—

吉川巧也（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

授受補助動詞を用いた依頼表現において、「てくれる／くださる」型と「てもらう／いただく」型の両者が入り得る状況の場合、「てもらう／いただく」の方が高い割合で選択される（原田 2007 など）。上記の違いについて、留学生を対象とした日本語教科書などでは、「てくれる／くださる」型より「てもらう／いただく」型の方がやや丁寧と結論づけられることが多い。一方、両者は同一文脈の中で入れ替えが可能であるため、使い分けの明確な基準を示すことは難しいと考えられている。本研究の最終目標として、文脈や本動詞部のパターンなどから、使い分けの基準を示したいと考えている。そこで、本発表ではまず、同一文脈において「てくれる／くださる」と「てもらう／いただく」の入れ替え可能な形式の整理、及び「てもらう／いただく」型の使用が好まれている要因を論じた先行研究を整理した。次に、調査者が抽出した実例から、使い分けに関する分析の観点を探った。